

# 明治始発期における日本文学史の

## 叙述姿勢に関する試論

### —軍記に関わる言説を中心に—

菊野 雅之

#### 1 はじめに

明治14年に発行された『本朝文範』は、国学者稲垣千穎によって編集された中等国語読本における最初の古典教科書である。その背景には和文を通用文とするべきという国学的な和文主義があった<sup>1</sup>。この『本朝文範』で注目すべきは、中古和文とそれを模した近世擬古文が中心に教材化されている一方で、中世和漢混淆文はきれいに排除されている点である。漢文混入によって文章の読解が困難になったことを難じる稲垣は、和漢混淆文の価値を純粋な和文に比べて低いものとして位置付けていた。ただ、初学者が『本朝文範』を学習することの困難については、稲垣自身も認めており、『本朝文範』の前段階として和漢混淆文を中心に扱った『和文読本』が準備されている。『国語教育史資料』（第2巻教科書史）は、『和文読本』について「書名の表題において「和文」を特にとり出しているものはあまり見あたらない。」と述べている。この『和文読本』という書名は、理想としての和文にたどり着くための階梯であるという稲垣の国学的な姿勢が現れていると解釈するべきなのだろう。

もっとも、この『和文読本』は、稲垣の当初の意図とは異なり、普通文の模範である和漢混淆文を収めた教科書として長期間使用された。当時の日本では複数の文体が通用しており、その統一が急がれていた。その役目を負うのが普通文と呼ばれる明治版和漢混淆文だった。小学校・中学校の読本は、事実それに対応した編集が進められたのである。そして、古典教材もその普通文との対応関係の中で、教材としての価値が捉えられ、カノンとして再編されていくこととなる。

そして、明治期に創成された日本文学史も、普通文や教科書教材と無関係ではあり得なかった。明治期の文学史については、八木雄一郎による制度面からの研究がある<sup>2</sup>。また、都築則幸（2013）による文学史教科書の緒言を網羅的に調査したものもある<sup>3</sup>。ハルオ・シラネ、鈴木登美編著『創造された古典』（1999）や品田悦一『万葉集の発

明』(2001)などの成果を踏まえつつ、より教育史的に、教材史的な把握を可能とする成果が積み重ねられている。普通文の先達として和漢混淆文が認められ、それに併せて中世軍記が高い評価を得ることは、すでに指摘されている。ただ、その詳細な過程の解明についてはまだまだ不十分な状態だと言える。近代の日本文学史がどのような観点で各古典作品を叙述していったのかについて、国語科教育史の側面から中心的に扱われたこともない。本稿は、『日本文学史』の嚆矢とされる三上参次・高津敏三郎『日本文学史』の叙述を辿りつつ、同書がどのような観点から古典作品を評価しているのかを明らかにしていく。また、近代に始まった文学史の脆弱さを厳しく批判し、文学史の方法論の構築に挑んだ風巻景次郎の叙述をたどりながら〈文学史〉自体の評価のあり方についても考えてみたい。

## 2 日本文学史—教材としての始発—

伴蒿蹊『国文世々の跡』は、日本文学史の嚆矢としての評価を得ることはなかった。風聞談史(1994)が指摘するように、真淵学の流れにある国学者蒿蹊は、和文の歴史を叙述することを企図し、意図的に中世和漢混淆文を排除する態度をとったからである。例えば、中世軍記について、「又平家物語は(中略)是もよきことばども見ゆ。保元・平治物語・源平盛衰記は軍書のうちにてよきものとはいふべし。文章にはとりがたし。」とその補考において述べており、和漢混淆文についてある程度の評価を加えつつも、和文の文章史の一つとして扱うことはなかった。

日本文学史の嚆矢は三上参次・高津敏三郎『日本文学史』(1890)とされている。実は『国文世々の跡』と三上・高津『日本文学史』の叙述姿勢には共通点が見出せる。『国文世々の跡』が和文という文体に拘った点も、三上・高津『日本文学史』が普通文との関係性の中で文学史を論じた点も、彼らの時代の文章の改善を志向することが前提となっている。『国文世々の跡』は和文の可能性を見出そうとした。三上・高津『日本文学史』は、普通文の練度を高めようとした。結果的に和漢混淆文に対し真逆の評価をそれぞれ加えることになる。『国文世々の跡』は、異物である漢語漢文が混入してしまった文体と断じ、三上・高津『日本文学史』は、漢語漢文を加えることで伝達力を高めた新文体と絶賛したのであった。

三上・高津『日本文学史』は、『平家物語』などの軍記を「歴史体の文」という項に収め、次のように述べる(中略は古今著聞集や水鏡に関する部分)。

水鏡の文体は大鏡と同じく、殆んど純粹なる平安朝の文なり。保元物語、平治物語などは、漢文を交ふること尙少しといへども、平家物語は、之を交ふること既に稍多く、源平盛衰記に至りては、益多し。此二書の如きは、啻に漢語の多きのみならず、文脈さへ漢文の風を帯びたる所多く、情に応じ境に従ひて、或は紆余屈曲、簡淨明潔、或は柔軟、或は適健の筆を用ふる事、極めて自在にして、叙事

整々、議論堂々、実に和漢混和文の上乗にして、江戸時代の漢学者の手に成りしものと匹敵すべし。江戸以前の時代に出でたる此類の著書にして、能く之と肩を比べ得べきものは、唯、太平記あるのみ。平家物語が其凄惨悲哀なるところを写せる筆、及び趣味字句の外に在るの妙は、或は盛衰記に上るべし。是れその仏語仏説を交ふること殊に多きと、諷誦を主としたるとの故なるべし。然れども、全体の上より評すれば、少しく盛衰記に遜る色あるが如し。其記事も、盛衰記の中より、撰び抜きたりと思はるゝ所多きかと思はる。或は云ふ。平家先に成りて、盛衰記は後に他人の之を完成せしものなりと、それ或は然らん。

此等の諸書の著者は分明ならず。保元物語、平治物語、源平盛衰記は、共に葉室大納言時長の作るところと伝ふれども、既に右に云ひし如く、保平二語と、盛衰記とは、其文体甚だひとしからずして、同一人の手に成りたりとは見えず。而して時長といふ人も、亦其履歴を詳にせざるは、実に惜むべきことなり。平家物語は、信濃。前司行長なる人が作りしといふ。然れども、これもまた詳かならず。もと法師をして、琵琶に合して諷誦せしめしものなりとぞ。是れ即ち、後の謡ひもの、語りものゝ権輿なりといふ。(中略) 保元物語、平治物語は、各其年代の変乱をしるし、源平盛衰記は、両氏の興亡盛衰を述べたれば、大に其時代の事情を詳かにするを得へし。近時歴史編纂新法の開けしまでは、修史家概ねみな此等の書のみを依頼したり。余輩は、今、其史学上の価値を問はず。其文例を下に掲げて、以て其文章上の光輝を發揚せんとす(下巻 pp.27-30)

源平盛衰記が平家物語に先行するという論が示されたり、軍記の史学上の価値については問わないことを断ったりと、軍記研究が始まったばかりであることを示す叙述が見てとれる。そういった中で軍記をどのように評価されているのか。「是れその仏語仏説を交ふること殊に多きと、諷誦を主としたるとの故なるべし。」、「もと法師をして、琵琶に合して諷誦せしめしものなりとぞ。是れ即ち、後の謡ひもの、語りものゝ権輿なりといふ。」というように琵琶法師による語りとの関わりについても言及されてはいる。ただ、作品を積極的に評価する言葉が費やされるのは、文体に関する叙述においてである。三上・高津『日本文学史』は、軍記の文体を、漢文を導入した「和漢混和文」における最上のものと評価し、その表現能力の拡大を絶賛する。そして、その和漢混淆文は、「江戸時代の漢学者の手に成りしものと匹敵すべし」とするのである。

かくの如くして、新に漢学者の手に成りたる、一種の和漢混和文は、実に今日国文の模範とすべきものなり。優美にして、しかも雅文のごとく柔弱ならず。逾強にして、しかも漢文の如く佞屈ならず。妙に和漢両文章の粹を抜き、長を取りて之を混化融成せしものなれば、如何に富瞻なる思想も如何に錯綜せる事物も之を写し出だすに於て、自由自在ならざるなし。抑、社会の現象、彌よ複雑に趣き、

学問の辞論、益高尚に進むに及びては、たとひ如何に艶麗にして、また如何に巧緻なるにもせよ、かの源氏物語、若くは枕草紙の如き文章のみに依頼しては、言語文字の数も少なく、語格句法も意の如くならず、萬物足らぬこと、多かるべきは勿論なり。されば、此等の文章は江戸時代の雅文（第三章を看よ）とともに、わが国文の精華とも云ふべく、骨髓とも称すべしといへども、決して今日に行はるべき、国文の標本なりとは云ふべからず。漢学者の手より生れ出でし、この和漢混和文こそ、実に標本とすべきものなれ。（下巻 pp.211-212）

平安以来の和文を「わが国文の精華」とも「骨髓」とも言うべきものであるとしつつも、新たな時代における複雑な事象を記述していく言葉としては不適切であると断じている。そして、近世の漢学者による「和漢混和文」こそが今日の「国文の標本」であるとする。漢学者の和漢混和文が模範として捉えられるのは、明治期の通用文である普通文もまた和文と漢文の適切な混淆から形成された文体であり、その模範が強く求められたからである。なお、この三上・高津『日本文学史』にもすでに「言文一致」の言葉が確認されるが、俗文を文語化したものとして、新たな国文としてはふさわしくないものとして退けられている。この言文一致体に対する見解は、当時の一般的な見解であり、言文一致運動による文体観の大きな変化はもう少し時を待たねばならなかった。1890年当時において、求められていたのは普通文の創成と確立であり、その模範となるべき和漢混淆文によって記述された作品群だった。

本稿では各作品に関する全ての記述に対して論じる余裕はないが、三上・高津『日本文学史』において、作品の評価の観点として、普通文の文範となり得るかどうかという点が大半を占めていたことは確かである。三上・高津『日本文学史』が、イポリット・テーヌの『英国文学史』（1863—1864）やポスネットの『比較文学』（1886）を踏まえた上で記述されていることは、久保忠夫（1975）によって指摘されていることだが<sup>5</sup>、その具体的な記述態度をどれほど摂取したのかは明らかになっていない。『英国文学史』を読んでみても、テーヌの記述態度と三上・高津のそれは全く別のものである。三上・高津『日本文学史』が出版された1890年代は、国文の模範を示すことが喫緊の課題とされており、文学史もまたその課題に対応することが迫られていた。普通文に対する文範という観点から、軍記の評価の言葉を紡ぎ出すことは当然のことであつたのだろう。

三上・高津『日本文学史』は、各節が終わる毎に各作品から抽出した文章が掲載される形式が繰り返される。軍記が含まれる「歴史体の文」の節では、鎌足公の薨去（水鏡）、病人を乗つるを止むる官符（同）、仲国曾我野に小督を求む（平家物語）、小松内府泣て父を諫む（源平盛衰記）、旧都の月（同）、馳遂の中の連歌（著聞集）、瓜中の蛇（同）が掲載されている。叙述の最後に作品の一部を掲載するというこの体裁は、この後続く文学史にも採用されている形式である。

三上・高津『日本文学史』の緒言には、次のようにある。

一此書を教科書として用ひんには、江戸時代の文学より始めて、次第に古に遡るべし。これ易きより難きに進み、近きより遠きに及ぼす教育の原則によりてなり。然れども、江戸時代の文学にも、王朝の文学に類する者あり。鎌倉時代の文学に、却りて江戸時代の文学より、解し易き者もあるべし。之を要するに、本書の作例を講読する順序、及び之が選択所捨は、一に之を享受する者の、方寸にあるべしといへども、著者の考案は、先づ本書に載せたる近代の和漢混交文より始め、次第に遡りて、中古体の文を講習し、稍、中古体の文に習熟したる時に當りて、韻文即ち和歌の類を講授し、終に上古の文学に進むにあり。而して専ら作例を講読するときにも、一方に於ては、教師常に本書の総論を斟酌し、また其時代の文学の状態を節略して、生徒に話すべし。且つ教師生徒互に例証を批評するも、亦甚だ有益なるべし。

発刊当初から教科書として活用されることが前提で作成されていることは、この文学史の性格を考える際の重要な要素である。そして、この後陸續と出版される文学史も学校教育で使用される教科書として発行されるのである。日本文学史は創造されたその瞬間から、すでに教材としての性格も有していた。そのように考えると各説の末尾に示される各作品の「作例」はまさに教材として扱うには十分な分量を持っており、当然、教室で教科書として紐解かれる場面が想定された選定がなされたわけである。

坪内逍遙が三上・高津『日本文学史』を紹介した記事（「三上、高津両学士合著日本文学史上巻金港堂発行」『読売新聞』1890.11.14 別刷 p.2）がある。

人の欲に限りはなけれど我最初の文学史としては誰か限りなく欲をいはむや少しく欲をいはば巻頭にいと長々しき文学論は疵也凡例の中に短く記されて当然なりき初学の便にとての老婆心切と見ゆれど文学論としては深からず初学の為としては長々しきに過たり第二には古文に注解無きこと教科書としては不足なり此ままにては地方の教員は困ずべしまた総て文例を別にして本文の末に一束とせられたる、却りて学ぶ者の為に不便なりこれは評論の都度且論じ且例証ありし方便なりきさる例は西の文学史にはいと多き例にてよくすれば最も興のある法なるに何故に用ひざりけん

これは本邦初の日本文学史出版に対して、祝いの言葉を並べつつも、ところどころ注文を付けている箇所である。坪内が教科書として見た際の不備について述べている点をここでは確認しておきたい。

なお、文学史教育について、規定上最初に触れたのは、1892年の「尋常師範学校ノ学科及其程度」においてであり<sup>6</sup>、そこでは第3学年に毎週2時間で、「文学史ノ大要」・「作文」・「読書作文ヲ教授スル順序方法」を学習することとされている。「文学史ノ大要」には次のようにある。「片仮名平仮名ノ起源ヨリ国文学ノ発達変遷ノ要略ヲ

授ケ古今諸体ノ文章及歌ノ標準トナルヘキモノヲ講読セシム」。この規定に従って、尋常師範学校では正式に文学史の学習がスタートを切っている。ただ、こういった制度面の整備を待たずに、三上・高津『日本文学史』は教材として使用されたようである。三上・高津は『日本文学史』をさらに教授用に縮約した『教科適用日本文学小史』（1894）を出版しているが、これは、『日本文学史』は授業で扱うには大部であるので縮約してほしいとの現場の教員からの要望に応えたものである<sup>7</sup>。日本文学史が教材としての性格を当初から有していたことは、文学史の記述態度を評価する際に重要な観点である。しかし、日本文学史という看板のためか、その教材性については捨象されて論じられることが多いようである。

### 3 日本文学史という方法論—風巻景次郎の発言を中心に—

文学史に位置付けられる作品とはどのような作品なのか。あるいは、作品にどのような言葉を添えるのか。これは文学史を記述する際の中心的な事柄であり、教材性を担保する当時の根拠ともなった。文学史の最初期に限って言えば、その評価軸は、普通文の模範たり得るかどうかが重要な観点だった。ハルオ・シラネ（1999）は次のように述べている<sup>8</sup>。

一八九〇年代以後の国語教科書は、国語を書くためのモデルにするという実際的な目的のために、テキストを選定した。（中略）この当時の明治の教科書編纂者は、中世・江戸の文章、とくに漢文の表現を和文の文法と組み合わせた和漢混淆文こそ、明治における文章の模範としてふさわしいと考えたのである。実際、芳賀矢一が「和文の悲哀なるに漢文の雄壮なるを交へ」たものとして賞賛した『源平盛衰記』（『平家物語』の異本）が明治期にカノン化されたことは、それが和漢混淆文の代表例と見なされたことと大きく関連している。

シラネは、源平盛衰記を文体の模範として評価した一例として、芳賀矢一・立花銚三郎の『国文学読本』（1890）を引用している。『国文学読本』の例言では、まず「一。此書は読者をして粗々国文学の通観を得せしめん事を期し、専ら教育上、並に文学上の目的を以て編纂せり。」として国文学の概要を学ぶことが第一目的であるとする。また、「八。此書古代に略にして近代に詳なるは、普通文の模範とすべきもの彼に在らずして此にあればなり。徒に高尚なる古文を今日に通用せしめんとするが如きは編者が志にあらず。」ともあり、「普通文の模範」となる文体への意識が強いことが明らかにされている。『国文学読本』は作者別に、文学史を区分しており、『源平盛衰記』は葉室時長の項で登場する。

葉室時長（紀元千八百年代）

時長は伝記詳ならず、たゞ其作れる源平盛衰記、世に知らぬものなし。或人の考に、盛衰記は宝治二年より建長元年までの間になりしならんといへば、時

長は此頃世に在りし人なるべし。その文和文の悲哀なるに漢文の雄壯なるを交へ、流暢精細にして、よみもてゆくに、まのあたり千古の現場を見る心地す。太平記と相並びてともに比類著作の巨擘なり。

この叙述の後には、「成親已下被召排事」、「小松殿諫父事」、「落行人々歌附忠度自旋歸謁俊成事」、「義経落鴨越並畠山荷馬事」の本文が掲載されている。説明の後に、作品の一部を並べる体裁は、三上・高津『日本文学史』と同様である。また、その評価の観点があることも確認できる。三上・高津『日本文学史』や芳賀・立花『国文学読本』によって切り開かれた日本文学史は、その後出版が相次ぎ、活況の様相を呈する。この時期について風巻景次郎（1958）は次のように評している<sup>9</sup>。

そして三上・高津の『日本文学史』が出ると、続いて鈴木弘恭の『新撰日本文学史略』（二十五年）や大和田建樹の『和文学史』（同年）が出た。しかし三上の『日本文学史』もすごぶる調子は月並みで、年代誌的な説明と国文学読本的な引例とを交互に重ねたものに過ぎず、よく読まれたアストンの『日本文学史』や、後年書かれたフローレンツの『日本文学史』と較べても、はるかに調子の低いものであった。（中略）といっても大和田・鈴木の諸学者に較べれば、三上の『日本文学史』も出来はそれほど悪いともいうべきものではなく、いわばそつのない優等生の試作品であった。ただそこには福沢諭吉の『文明論之概略』や田口卯吉の『日本開化小史』に見られたような、民族の解放に戦のく維新当時の自由民権の精神の高揚がほとんど感じられないのだが、実は文学形式の最も切実な主題は、近代個人意識に貫かれた人間像の造型であって、すでに青年の現実からやや遊離した、法学書生気質の天下国家論ではなくなっていたのである。しかしまた、青年らしく気負い立った選ばれた人間としての誇りとたまかで浪漫的な夢もまだ生命を保っていて、政治に行こうか、文学者と成ろうかという煩悶、文学は畢竟人間一生の業とするに足りぬとする懊悩が、二十年代の最も典型的な時代の思潮であった。そうした当時のインテリ青年の精神に触れながら、文学研究という事業をもって明治新国家の代表者と成り得るという選ばれた道を歩いていたのが芳賀矢一で、その『国文学史十講』は、当然のことながらその時代文学史の最高傑作となった。それは学術をもって国家の選良となるべき運命を背負つて、ドイツに留学しようとする直前の東京帝国大学助教授が三十歳を越した間もないころの著作。気負ったあせりもなく煩悶する神経質もなく、国民的建設への率直で明るい信頼に満ちた安定感のある均衡が支配している。傑作のゆえんである。と同時にやや神経は粗笨であって鋭利に過ぎるところがない。

風巻が、三上・高津『日本文学史』に対して「すごぶる調子は月並み」、「そつのない優等生の試作品」などと、積極的な評価を下さないのは、「文学史の構想力の主体的脆弱さ」<sup>10</sup>を見取っているためである。文学史構築の方法論とその実現に精力を注

いでいた風巻は、西洋文学史の模倣と国学的文学史把握を混交した日本文学史の記述姿勢を厳しく批判する。この風巻の批判するところは妥当なものであると思うが、一方、風巻が当時の文体の混乱あるいは統一の問題について触れないまま、文学史批判を展開する点については問題なしとは言えない。確かに、風巻の言うように、明治期文学史には構想の脆弱さがあった。だが、文体の混乱期にあつて、その状況を是正しようとする意識も文学史側にあつたわけであり、それも踏まえた上での批判であるべきだった。例えば、上代・中古の作品群を取捨選択する姿勢が、あくまでも国学上の重要文献であるかどうかという観点から選抜されているにすぎないことを風巻は指摘する。先に示した国学的文学史の把握のことである。その上で、中世軍記が文学史に採り入れられている理由については次のように述べているが<sup>11</sup>、説得力に欠けることは否めない。

平安時代・鎌倉時代などの作品についても、文学史の採択範囲は『扶桑拾遺集』などのそれと、同種類のものを軸としていることがわかるのであつて、国学系の採択基準をほとんど脱れるものではない。ただ説話集や軍記物語やのごとく眼に触れやすいものがそれに追加されているに過ぎない。

しかし、この追加もまた重要な意味を持っていることを忘れてはならない。中世において説話集・軍記物語・謡曲・連歌・お伽草子の類を追加した見識はいずれから取りきたったものであるか。(中略) 当時の事情としては、それは西洋の文学史に眼をひらかれた意識以外にはないと思われるのであつて、西洋文学史に対抗すると同時に模倣するところからそうしたジャンルの取り上げ方は生まれに違いないのである。三上博士が『日本文学史』の序に述べたところはそれを端的に推測せしめるものを持っている。

以上のようにして、従来の文学通史の類型の一部として眼につく記載作品のジャンルの時代による不同という特色は、上世文献についてはほぼ国学者の取り上げたところに従い、中世以後、とくに近世の文献については、西洋に影響を受けた意識によって文芸的作品に主力を注いでいるところから生じるのであつて、こうした作品採択における諸基準の混交ということは、文学史の構想力の主体的脆弱さを最もよく証明しているものに外ならない。

普通文の模範として和漢混淆文が認められ、その観点から軍記が評価されている点を捨象し、その上で「西洋文学史に対抗」し「模倣」したため、軍記等は取り上げられたとする。西洋文学史に対抗し模倣するとなぜ軍記が目されるのかといった具体的な指摘はなく、この点については、上代や中古の記述に比べ、とたんに説得力がなくなるのである<sup>12</sup>。

三上・高津『日本文学史』を初め、それに続く文学史たちが、作品の成立と作者に関する事項以外は、文体の評価に終始し、「解題的の作品年代誌」(風巻「文学史の



問題)」<sup>13</sup>と評価されるような姿勢があったことは確かである。風巻が傑作と評価した『国文学史十講』の軍記に関わる箇所(第6講)を見てみると、文体の問題はすでに見られず、琵琶法師による語りや、近世における受容について重点を置く記述となっている。『国文学史十講』が出版された1899(明治32)年時点では言文一致運動も展開中であり、古典の文範性はまだその意義を有していた。そういった状況にあって、古典の文範という問題意識から早くに脱出し、新たな視点で作品を論じ直したことは、新しい文学史の時代を感じさせるものだった。『国文学史十講』は、帝国教育会の夏季講習会で芳賀が日本文学史の概要を講義し、講習会では都合で省いた明治文学の一章を加えて、補訂したものである<sup>14</sup>。談話体で記された文学史という意味でも最初期に位置すると考えられ、清新な印象を読者は受けただろう。

ただ、同書は講習会に参加した教師たちに語られたものであり、中学校教科書として出版されたものでもない。これは先に評価されたアストンやフローレンツの文学史にも言えることである。つまり、中等教科書として編集されたものと、そうではないものと同列に論じることにすでに問題があったのではないか。あるいは、文学史が教科書という枠組みの中にあることを前提とした議論でなければならなかった。その意味で風巻の議論はフェアではなかった。三上・高津『日本文学史』への、「年代誌的な説明と国文学読本的な引例とを交互に重ねたもの」であり、「いわばそつのない優等生の試作品」であるという揶揄的な風巻の評価は、そもそもそれがまさに教科書として求められていた性格でもあり、風巻の意図とは裏腹に、むしろ正当なものだったわけである。

#### 4 おわりに

風巻から教育の問題・文体の問題を捨象せしめたものは何だったのか。そこには言文一致体の完成という時代状況を想定する必要がある。古典から、あるいは文学史から文体の問題が解消された地点に風巻はすでに立っていた。通用文としての地位が、普通文から言文一致体に移行することで、古典作品に与えられていた「普通文の模範」という評価は意味を成さなくなっていた。文範性が古典から消失した時に、改めて古典を評価する言葉や枠組みを生み出す必要が発生し、そういった営みの先駆に芳賀矢一の姿がある。古典を担保するかつての枠組みが喪失し、その苦しみの中から文学史を語る言葉を紡ぎ出す営為に比した時、明治期の文学史の姿勢は、歴史社会学派の一人と目されていた風巻にとって、随分物足りないものに写ったのだろう。

しかし、日本文学史の始発が日本文学史教科書の始発でもあり、文体統一の苦しみの中から文学史を語る言葉が紡ぎ出されていった事実は、ここで確認しておかなければならない。そして、その上で新たな局面の中で語られた古典教育の言葉の発生経緯を明らかにすることが、現在の古典教育の立脚点を見定めることにつながるのである。

- 
- 1 菊野雅之「古典教科書のはじまり—稲垣千穎編『本朝文範』『和文読本』『読本』—」『国語科教育』第69集 2011
  - 2 八木雄一郎「中学校教授要目（1902（明治35）年）の制定に伴う「国文学史」観の確立：明治20年代と30年代の「国文学史」テキストの比較から『信大國語教育』20 2010
  - 3 都築則幸「明治期の中等教育における国文学史教育の実態とその変遷—教科書の緒言・文例を中心に—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』20号-2 2013
  - 4 風間誠史「幻の文章史・幻の修辞学—伴蒿蹊『国文世々の跡』をめぐって—」『相模国文』第21号 1994  
風巻景次郎「文学史の問題」『季刊国文学』第1号 1947年（『風巻景次郎全集1日本文学史の方法』1969 pp.432-433）にも同様の指摘がある。
  - 5 久保忠夫「国文学研究事始—三上・高津『日本文学史』とその文学論—」『季刊藝術』第35号 vol.IX No.4 1975
  - 6 八木雄一郎「『国語』と『古文』の境界線をめぐる対立—『尋常中学校教科細目調査報告』（1898（明治31）年）における上田万年と小中村義象—」『国語科教育』第65集 2007
  - 7 この点については、前掲注2 都築（2013）の指摘がある。
  - 8 ハルオ・シラネ、鈴木登美編著『創造された古典』 1999 p.420
  - 9 風巻景次郎「日本文学史の足どり」1958（前掲『日本文学史の方法』 pp.542-543）
  - 10 風巻景次郎注3 前掲『日本文学史の方法』p.441
  - 11 風巻景次郎注3 前掲『日本文学史の方法』p.440-441
  - 12 西洋の叙事詩と対応するものとして軍記を位置付けるいわゆる「叙事詩論」の登場はもう少し後のことであり、この時の風巻に叙事詩論の観点は存在していない。生田弘治（1906）「国民的叙事詩としての平家物語」がその最初期であるとされる。叙事詩論の登場については大津雄一『『平家物語』の再誕 創られた国民叙事詩』（2013）に詳しい。
  - 13 風巻景次郎注3 前掲『日本文学史の方法』p.436
  - 14 藤井貞史「解説」（芳賀矢一『芳賀矢一選集』第二巻国文学史編 1983 p.593）